２０１９年度「全国中学生人権作文コンテスト」岐阜県大会
優 秀 賞

私にとってたった一人の兄

可児市立西可児中学校３年　久保　綾子

私には、三つ年上の兄がいる。しかし、学校で兄の話はあまりしないようにしている。したくないのだ。なぜなら私の兄には、知的障がいがあり、それを話すことに抵抗があるからだ。

兄は現在、可茂特別支援学校に通っている。私が小学校一年生までは、南帷子小学校に一緒に通っていた。それは、兄が私と一緒に学校へ行くことをとても楽しみにしていたからだったと母から聞いた。兄は文字の読み書きが苦手で、話せる言葉も私よりうんと少ない。でも、自分のことは、自分でできる。片付けをすぐにするのは、兄弟の中で兄だけだ。気持ちを伝えることもできるし、車のテールランプを見ただけで、車種を当てることもできる。学校ではようぎょう班で作業をしており誰よりもたくさんお皿を作ることができる。明るくて先生たちからもたくさん声をかけてもらえ、好かれている。それでも私は、その兄のよさを友だちに上手く伝えることができない。学校で私には兄がいることが分かると数々の質問を受ける。「何歳？」「どこの学校？」ここまではいい。しかし知的障がいがあることを伝えると、「顔は、変わった顔なんでしょ？」「脳は小学生以下ってこと？」「背は低い？」「しゃべれないんでしょ？」私は、質問に答えながら、兄も頑張っていることや、兄にもできることがあり、私たちと同じなのだと、そんなことを伝えたくて話すのだが、うまく伝わっていないと感じる。なぜなら、私が質問に答えた後は、相手の表情や態度がよそよそしくなるように感じるからだ。もちろん、兄を知っている同じ小学校の人たちや、話を聞いても態度が変わらない人たちもいる。本当に素敵な仲間だと思っている。そして、みんながそうならいいのにと思う。

私自身、兄に対して、「兄が普通のお兄ちゃんだったら、どんな感じなんだろう。」と思うことがある。でも、それは、思ってはいけないことだし、思っても仕方ないことだと分かっている。でも学校での友達とのやりとりを思うと、「兄が普通だったら、こんな思いをしなくて済むのに。」と思ってしまうのだ。母は、小学校の教師をしているが、自分の担任の学級の子ども達に兄に知的障がいがあることを必ず話すと言う。それは、どんな子どもにも得意不得意があること。それでもみんな一生懸命生きていること。兄に障がいがあっても、母にとってかけがえのない子どもであり、少しの成長がとてもうれしいこと。親にとって子どもは、何があっても大切であることを伝えたいからだそうだ。この母の言葉は私を救ってくれる。障がいがあるからって何も変わらない。みんなそれぞれ自分らしく生きているのだから。

私たち家族にとって、忘れられない出来事がある。それは、文字が読めなくてパニックになった兄が、「僕の頭、壊れてる。直してほしい。」と泣きながら自分の頭を拳でたたき訴えてきたことだ。障がいがある人もどんなに頑張ってもなかなかできるようにならない悔しい気持ちをもっていることを、障がい者の家族以外の人たちは、知っているのだろうか。知的障がいがあっても、できなくて悔しい気持ちは、私たちと同じなのだ。なのになぜ、障がいがあると、私たちと何もかも違う何も分からない人だと思われるのだろう。人と見た目が違う、行動が違うと、「変な人」という目で見られることが、かわいそうだしそんな兄がいることを気の毒に思われる。私は、それが一番嫌だ。確かに、兄が普通だったらと思うことはある。だけど、私にとっての兄は、たった一人で、知的障がいのある兄なのだ。腹が立つこともあるし、喧嘩をすることもある。笑い合うこともある。それは、普通の兄妹と何も変わらない。「綾子大好きよ。」と言ってくれる兄が私も大好きだ。

人はなぜ差別の心をもつのだろう。差別のない世の中になったらいいのに、と思う。兄をそのまま受け入れてくれ、認め、支え合える世の中だったらと思う。調べてみると、「差別とは、存在の否定である。特定の集団や属性に属する個人に対して特別扱いをする行為である。」兄は、「できません」「分かりません」「やって下さい」とよく言う。この言葉は障がい者にとって大切な言葉であり、相手にしっかりと自分の困っていることを伝えることを繰り返し教わるのだそうだ。自分の気持ちを伝えられる人もいれば、伝える手段がない人もいる。困っている人に気づいて、手を差しのべられる人に私はなりたい。兄が一生懸命読み書きの練習をしている時は、そっと隣で見守っていたり、手伝ってほしいと頼まれたときは、一緒に手伝ってあげたりしたい。兄が頑張りたいことを一緒に応援したい。障がい者だからという理由で兄の夢を壊したくない。私のそばでいつも一緒に過ごしている知的障がいの兄。これから先ずっと変わることのない私の大切な兄を、大事にしていきたい。